

十五世紀における大友氏の動向について

近藤 晃 弘

はじめに

室町中期の政治状況として、幕府第六代將軍義教は、衆議体制を重視した上で、上意専制という將軍主導による政治体制を構築していたが、その結果として永享の乱・結城合戦など、多くの反乱が発生した。九州も例外ではなく、義教支持者である大内盛見が、幕府御料所となった筑前国の代官に就任したことで、大友・少弐氏以下九州の守護の反発を受け、度々合戦に及んだ。

その義教の政治構想も、嘉吉の乱であっけなく終了してしまうのである。以後幼少將軍が続き、政治は管領衆議主導へと流れが変化していく中で、八代將軍義政の時代には上意専制が実現しにくくなっていった。

先行研究として、この時期の室町幕府と守護の関係について川岡勉氏は、「義教による守護家や国人家への家督介入も上から一方的になされたものではない。むしろ、上意の介入に説得力や実効性を付与するためには、分国内の地域状況への目配りが不可欠であった。

駿河今川氏の家督抗争に際して、上意のもとで、国人・守護被官らの意見が聴取された。これは將軍の成敗に過失が問われるのを防ぐためで、これに対する国人等の返答は、「簡要ハ可為上意」であり、これを踏まえて、義教は相続人を決定し直すのである。晩年の諸大

名彈圧についても、大名衆議と衝突したり蹂躪した形跡は認められない。むしろ、衆議を主導してきた人々が相次いで死去するなど、衆議の機能が低下する中で、専制的側面が強化されたとみられる。上意専制の拡大は彼の意欲的な政治姿勢の表れと解すべきで、その背景には地域諸勢力の自立的な動きが想定される。」¹⁾としている。

また、桑山浩然氏・今谷明氏の両氏は奉行人体制から分析をおこない、桑山氏は「幕府意思を表明するのに奉行人奉書が増加し、それに反して管領奉書が減少していく。義教の御前沙汰体制は、短略的に將軍専制と結びつけるのではなく、將軍・管領・奉行三者の中で評価すべきもの」²⁾とし、今谷氏は、「義教の専制とは、將軍が式評定衆クラスの一部奉行人を駆使することによって、管領を極力政務の場から排除せんとした体制であった。嘉吉の変後は、義教期に奉行人が分有していた軍事指揮権、戦功認定権は管領の手によって剥奪されたとみられる。」³⁾としている。

大友氏に関しては、外山幹夫氏の詳細な分析があり、「大友氏が帯していた豊後・筑後両国に於いて、受給者・預置件数が共に多く、この国の領主と深い関係があることを示している。預置の内容は欠所地は殆ど認められず、在地領主の所領安堵が最も多くなっている。ここに幕府権をテコとせず、徐々に大友氏独自の知行制が成立しつつある。」⁴⁾とし、中央政権に依存せず、ある程度の領主権が確立していたと認識している。

本論では以上の視点から、この時期の大友氏の動向を幕府との関係を勘案しながら考察したい。

永享年間の抗争

事の発端は、大内氏の大友領の侵略である。応永の乱で死んだ大内義弘の跡を盛見(義弘弟)が興し、九州探題渋川満頼を援助し九州に進出、豊前・筑前国の守護職を兼ねた。そして、幕府御料所筑前国の代官となり、博多を支配下に置き対朝鮮・明貿易の独占をした。

一連の大内氏の行動は、大友・少弐氏等北部九州の守護を大きく刺激し、特に大友氏は蒙古合戦の勲功賞として筑前志摩郡(福岡市)に所領を得て、博多冷泉津や香椎浜に近い立花城周辺にも所領・所職をもっていたからである。永享二年(一四三〇年)頃、大友・少弐・菊池氏は、大内氏の侵略行動に抵抗をはじめた。

幕府は両氏(大内・大友)の和睦をはかったが、永享三年(一四三一年)大内盛見が大友持直のいる立花城(筑前)を攻めたため、同年六月、糸(怡土)郡萩野の戦いで大友・少弐の連合軍は、盛見を破り自刃に追い込んだ。

この時期中央では、永享初年から將軍義教の「万人恐怖」といわれる有力守護大名抑圧の専制体制の成立期であり、奉公衆制度の確立期でもあった。義教が將軍に就任した正長元年(一四二八年)には、「日本開闢以来土民蜂起の初」といわれた正長の土一揆があり、そして、「京都扶持衆」から足利持氏が上洛し、武力をもって義教と対決すると決意しているという注進が相次いだ。

この「京都扶持衆」とは、反持氏勢力を幕府が取り込み扶持した武士で、下野の宇都宮氏と結城白川氏以外は上杉禅秀の乱後に扶持

され、鎌倉府を制肘する役割を担っていた。⁵⁾

さらに後南朝の動きとして、伊勢国司北畠満雅が小倉宮(後龜山天皇皇子)を奉じての拳兵等があり、義教政権の一つの危機であった。このような状況の中で、中国の雄である大内盛見は参洛して將軍支持を表明した。義教は大いに喜び感謝した。そして、管領邸への渡御に供させるなど好待遇をしている。

このように大内軍は、在京守護や鎌倉公方に対する押さえとしての役割を担う義教の陰の直轄軍であったとし⁶⁾、盛見が討たれた事は義教にとってはまったくの想定外であった。

幕府は永享三年七月、安芸の小早川弘景と毛利小法師に御内書を下し、大内氏に合力し大友等を討てと命令した。これはあくまでも幕府が大内方を支持し、大友方を討伐する姿勢を示したのである。大内・大友両氏は上洛し、持直は盛見の非を主張し、以後幕府の命に従う旨の起請文を提出したので、所領没収は免れた。

だが同年十一月、両氏は再び合戦に及んだので幕府は持直の大友家家督を没官し、永享四年(一四三二年)、大友親綱に豊後国守護職を任命した。持直はこれを認めず抵抗を続ける。大内氏は盛見の跡は持世が惣領職を幕府から安堵をされ、その持世の要請により、永享五年(一四三三年)三月、幕府は持世に持直・満貞に対する治罰の御教書と御旗を交付した。

それにもかかわらず、持直等一派は、根強く抵抗戦を続ける。永享七年(一四三五年)になると、戦闘は肥後から海部郡の姫岳(臼杵・津久見市の境、標高六二〇m)に立てこもり展開され、一連の

戦いで幕府軍の持世に合力していた河野通久（伊予国守護）が戦死している。

幕府は、持直方の内部分裂を計り、永享八年（一四三六年）姫岳周辺の出城である王子城（野津町）にいた持直一派は没落し、翌九年（一四三七年）、大内持世は幕府に戦勝報告を届けている。

およそ十年にわたった永享の争乱の特徴として、

- ① 大内と大友による博多権益をめぐる戦いであったこと。
- ② 大友氏が初めて、幕府の討伐対象になった。
- ③ 持直一派の中に、大友五郎（後の十五代親繁）と親著（親繁父）が加わっていた。

④ 豊後国内の国人の多くが持直を支援していた。着到状を見ると、主に津久見衆・浦辺衆・海部衆等の水軍衆が多いのが目立つ。

以上の四点が挙げられるが、特に④の国人衆（水軍勢力）の援助がなければ長きにわたる抵抗は実現できなかったと考えられる。

対外貿易

④の背景として考えられるのが、対朝鮮貿易である。持直期の朝鮮貿易では、永享元年（一四二九年）に初めて使を送って以来、世宗期七回、世祖期三回、計十回遣使している。この交易期間は、大内と抗争を繰り返した時期でもある。多くの水軍衆が味方したのもこの通交貿易による利益が有力な財源になっていたことは容易に推察されるのである。

応仁・文明の乱

持直の後、十三代親綱・十四代親隆に続き、文安元年（一四四四年）、親繁が第十五代豊後・筑後守護職に將軍義政から補任された。

嘉吉の乱により、義教による専制体制が終わりをつけてその影響もあるのか、親繁は領国統治権を強化していく。彼の領国経営について外山氏は、「親繁は、親著（親繁父）と持直そして親隆方両統から支持されて家督となり、氏継系・親世系の両派による両統並立を終わらせた。そして、彼の優れた人的資質によって支配体制の進展を打ち出した。」^①と評価している。事実史料からは、知行給与、訴訟処理の件数増加や司法権が進展したことが窺える。

そして親繁治世下のもう一つの特徴として、持直期以上に朝鮮・明貿易を積極的に推進したことである。理由としては、持直にははじめ子がなかったから、親繁を養子として私的に家督を譲った。これは持直が築いた基盤を親繁が受け継いだことを意味する。朝鮮に對しては、永享八年（一四三六年）以降から没年までの五十七年間に、記録を見るだけでも二十回遣使を派遣している。

これだけ多くの遣使派遣の背景には大友氏の博多支配があり、そこには博多商人の手によって船も借り上げて行われていたのである。大友殿管下といわれる有力な博多商人たちを手中に収めていたことが対朝鮮貿易を有利にしていたのである。

このように親繁の時代は、領国内外共に治世が充実しており、寛正三年（一四六二年）、親繁は幕府に申請し家督を嫡男政親に譲つ

ている。しかし、親繁はその後文明五年（一四七三年）に至るまで十二年間、後見として実権を振るった。

外山氏は、「これは迭立を止め、嫡子政親への家督譲与を強行したことに伴う内外からの重圧に対処しようとする、親繁の周到な配慮によるものであった。」⁸としている。

こうした中、応仁元年（一四六七年）を迎えるのである。周知のように応仁・文明の乱は、將軍義政の後継者争いから端を発し、管領細川勝元を首領とする東軍は將軍義政・義尚を奉じ、西軍の山名持豊が足利義視を奉じ戦端が開かれた。

この時、中国の雄である大内政弘が、周防・長門・筑前・豊前の兵を率い、山名持豊（宗全）を支持して挙兵したことから、大友氏もこの争乱に巻き込まれることになった。將軍義政は、政弘の強大な軍事力によって西軍が優勢になるのを恐れ、九州に於いて大内氏に対抗できる勢力を構築するため、政親の後見として実権を握る親繁に、政弘の領域である豊前・筑前の攻撃を命じた。

嫡男政親は当初、大内政弘の妹を妻にしていたので、縁によって政弘を援助しようとしていたが、親繁がこれに怒り政弘を攻めるよう命じたので、急遽これに従ったという。

この争乱で、大友氏は一貫して東軍側について行動しているが、政弘の入京転戦中に分国に侵攻する好機があったにもかかわらず、積極的な作戦行動に出していない。それよりも、領国の支配体制強化に力を注いでいた。これは、永享年間（姫岳合戦を含む）の幕府軍との抗争の経験から、彼独自の政治構想確立の方を優先させたのだ

ろうと思われる。

まとめ

大友氏にとってこの十五世紀は、前半は義教の上意専制の下、守護として存亡の危機を迎え、後半は領国統治の進展の時期であったという特徴がある。持直は、幕府側から見れば反抗者に映ったが、大友方から見れば分国の利益を守るための当然の行動であり、同様に博多の権益をめぐる大内氏との抗争の時代でもあった。

そして、親繁期の対幕府関係は、永享年間の状況とは大きく異なり、自立的な関係の展開期と推察できる。また、彼の治世に対する評価は、検討の余地はあるが概ね高い。このすぐれた政治的資質は、彼一人で形成されたものではなく、多くの人材が必要だったはずである。

山田貴司氏は、この点について対幕関係を支えた存在として注目が集まっている、「在京雜掌」を挙げている。

「大友氏の場合、京都で諸勢力との交渉を担った在京雜掌（ないし、それに類する人材）は、南北朝時代には置かれていたようだ。また、永享年間の紛争に際しては「南禅寺住」の「雜掌僧超書記」が大友持直と幕府の交渉に関わっており、禅宗寺院の人材を活用していることが認められる。

この様相が転換点を迎えたのが、やはり親繁の時代であった。親繁は、大友氏とゆかりの深い臨濟宗聖一派・三聖門派の禅僧、東福寺宝勝院の斯立光幢を在京雜掌に起用。これ以降、その地位は栖岩徳肖・圭甫光瓚・蘭圃光秀といった斯立光幢の法系に連なる人物に

より継承され、京都における人的体制は戦国期まで安定して継続していく。」⁹⁾としている。このように禅宗を保護していた大友氏は、彼らを強力なブレンとして活用し、中央政権からの情報を政治判断に利用していたのである。

以上、十五世紀の幕府と大友氏の動きを追ってきたが、川岡氏は、「守護の領域支配拡大は、義教期の時には行われていてその背景には、在地諸勢力の自立化、とりわけ民衆の政治的成長が存在した。：：（中略）・・・嘉吉の乱は、室町幕府―守護体制における求心力を低下させ、地域権力の自立化が一挙に表面化する。」¹⁰⁾とある。

この時期の大友氏の領域支配の強化が、他の地域と同じ条件で行われていったのかは、まだ不明な点も多く解明が不十分であったので、今後は、政治・外交（交易）・宗教等の考察をさらに深めていきたい。

註

- (1) 川岡 勉「室町幕府と守護権力」(吉川弘文館 二〇〇二年)
- (2) 桑山浩然「室町幕府の政治と経済」(吉川弘文館 二〇〇六年)
- (3) 今谷 明「室町幕府解体過程の研究」(岩波出版 一九八五年)
- (4) 外山幹夫「大名領国形成過程の研究―豊後大友氏の場合―」
(雄山閣出版、一九八三年)
- (5) 石田晴夫「戦争の日本史9 応仁・文明の乱」(吉川弘文館 二〇〇二年)
- (6) 桜井英治「室町人の精神」(講談社「日本の歴史」十二、二〇〇一年)

(7) 前掲註4参照

(8) 前掲註4参照

(9) 山田貴司「西国の地域権力と室町幕府―大友氏の対幕府政策(関係)史試論―」

戒光祥中世史論集 第1巻

「中世の西国と東国 権力から探る地域的特性」編者川岡勉

(戒光祥出版 二〇一四年)

(10) 前掲註1参照